

「日本研究」大学院生ワークショップ

3月18日ー19日

2025年3月18日から翌19日にかけて、東北大学にて国際的な「日本研究」大学院ワークショップが開催され、シカゴ大学、東京大学、東北大学、日文研、大阪大学から12名の大学院生が集まり、各々の研究について発表を行った。当研究室からは牛窪彩絢氏と徳田が、また東大の総合文化研究所からは1名が発表者として参加した。発表者は発表の元となる原稿をネイティブチェックを済ませた上で事前に共有し、互いに目を通しておく必要があり、ワークショップ本番前からしっかりと準備を整えておくことが求められていた。参加者の研究領域は多彩であり、近代日本を対象とした発表が目立ったものの、戦後美術史の新しい側面を描き出そうとするもの、人種という観点から文学を読み返そうとするもの、学校教育において周辺的なものとして位置づけられがちな活動の意義に注目するもの、TVアニメ表象における新しい動向を分析するものなど、意欲的・挑戦的な研究も多くみられた。ただでさえ扱われている内容の幅が大きいなか、語学能力の不足もあって、議論についていくのも必至であったが、ディスカッションと、ほとんど丸2日間行動をともにするなかで発生する“延長戦”によって、大きな刺激を受けることとなった。

私の発表は、近年の教育課程のなかで、宗教、および宗教と密接に結びついていると見なされている感情がどのように位置づけられているかを分析するものだったが、2日目の発表だったということもあり、初日に感じていた、学会とは異なる“ワークショップ”の雰囲気に合わせて、事前に用意していた内容に加えて、近年の教育哲学の動向も踏まえた、自身の根本的な問題関心を確認するようなスライドを付け足した。幅広い射程の議論へと展開していく気配もあったが、かえって混乱が生じたところもあり、他分野の研究者とどのように関心を共有するかに大きな課題があることを痛感させられた。

2日目午後のエクスカージョンでは仙台城跡と荒浜小学校を訪問した。とりわけ、震災遺構として登録されている荒浜小学校では、生々しく残る津波の傷跡や、あったはずの町が丸ごと消滅してしまっていた周囲の景観に、強い衝撃を受けた。本ワークショップの開催日が震災発生日に近かったこともあり、その時期の寒さをその場で感じとり、その日の子供たちや教員の方々、また避難していた住民の方々の大変さや心細さを、そのほんのわずか一端でしかないが、肌で体感することができた。総じて、本ワークショップは、参加にあたって多くの時間と労力を割くことが求められるが、その分だけ発見が得られる貴重な機会であり、このような取り組みが今後も続いていくことは、これから研究者を志す人々にとって大きな励ましとなるだろう。

(徳田安津樹)